

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

広がる・繋がる／社会福祉法人新栄会 オルト保育園

子どもたちが長期に亘って展開していく遊びに対して、どのような支援をしていますか？子どもたちの興味や探究の深まりに伴い、保護者や様々な地域の方との関わりを工夫することは、「科学する心」を育むことに繋がる一つの支援です。

一人の子どもの思いからスタートした色水の遊びが、布染めに発展。そしてこの活動が、仲間やクラスの子どもに広がると共に、地域の専門家の方の協力を得て、保護者とも共有することのできた事例をご紹介します



○ 花の色のふしぎ／5歳児

✿ 黄色い花が好き：Aちゃんがきっかけ

保育者は、Aちゃんが摘んだ黄色い花を紙にこすり付けて色を残そうとした。その様子を見て花の色に興味をもった子どもたちが、花の色水で布を染めることを思い付き、自分たちを「お花チーム」と呼んで繰り返し取り組んでいた。ツユクサやオシロイバナなど花の色水で試行錯誤して布を染めたが、思ったように綺麗に染まらず、「誰か詳しい人に教えてもらいたい」と言う。



✿ 綺麗に染めたい：“染物の達人”がやって来た！

子どもたちがあまりに熱心に「染めに詳しい人は誰か？」と聞き込みをしていたので、園長先生が染め物の先生を呼ぶ。

“染物の達人”に期待を寄せる子どもたち。

染物の達人は、玉ねぎの皮やコチニール（サボテンにつく赤い虫の染料）で、見事に染まる様子を見せてくれた。子どもたちはオシロイバナで染めたけれど、なぜキレイに染まらなかったのか質問した。

すると達人は「オシロイバナは命が短いので色が無くなってしまふこと、玉ねぎとコチニールは、魔法の薬が効くけれど、花は色がもたない上に魔法の薬も効かないこと」を教えてくれた。それでも、花で染めたい子どもたちは「どんな花ならいいのか」と聞く。達人は、マリーゴールドはこれから咲くキク科の花で、比較的色が出るかもしれないと教えてくれた。



✿ マリーゴールドで染めたい！：みんなで考える

子どもたちは花にこだわり「マリーゴールドで染めたい」と言う。マリーゴールドを集める方法をみんなで相談した。公園や人の家に咲いている花は勝手に摘めないため、どうしようか悩む子どもたち。Bちゃんが「家のマリーゴールドを根っこごと持ってくる」と言うと、そこまでするならマリーゴールドは諦めたらどうか？という意見も出る。様々な考えが出る中…。

Cちゃん：「マリーゴールドの種があるよ」

Dちゃん：「お庭に蒔いてみよう。毎日、水をあげたら咲く！」と、張り切る。

Eちゃん：「なかなか咲かなかつたら間に合わないかもしれない」

Aちゃん：「4月になっちゃったら、僕たち小学校だよ」と言う。

保育者は、玉ねぎの皮やコチニールでやってみるのはどうかと提案した。

保育園でカレーの時に調理さんに頼んで取っておいてもらったり、家から持ってきたりなど、自分たちでも皮が集められるため、玉ねぎの皮で染めてみるようになった。



✦ 見事に染まる玉ねぎの皮：クラス全体へ

鍋に玉ねぎの皮を入れ、数十分煮込む。手順や水、玉ねぎの皮の量も達人に教わった。黄金色の煮汁からはいい匂いが漂ってきた。「シチューの匂いがする」と子どもたち。

魔法の粉・みょうばんも入れ、綿の布をつけてグツグツ煮こんだ。取り出して水洗いしても布が白くならず色がしっかり残っている様子に、「水で絞っても色が落ちない！！」と、子どもたちは大感激！綺麗に染まった布を広げて乾かした。

お花チームの子どもたちは、染めた布を身に付けて、上手くいったことや染め物の楽しみをクラスみんなに伝えた。

布染めの活動は、クラスのみならず広がった。

タマネギ以外に、藍やコチニールでも布染めを経験した。



✦ プロセスを見せる：保護者や他のクラスへ

子どもたちが、染めた布を使ってファッションショーをしてみんなに（他のクラスや保護者）見せたいと言う。

作品展の中のファッションショーでみんなに見せることになる。

着てみたいと思う服をそれぞれデザイン画にした。

ファッションショーの経験のあるボランティアの墨絵の先生にコーディネートアドバイスを受ける。

子どもたちは、アトリエで素材を探し、自分のイメージに合う服を作った。

ファッションショーに至るまでの経過を写真と言葉で展示し、ドキュメンテーションファイルで子どもたちの姿やデザイン画なども紹介し、子どもたちの体験をみんなで共有した。

マリーゴールドで染めたいという思いは、次の5歳児に引き継がれた。



✦ 振り返って

「花の色の不思議」は、子どもたちの色水遊びが発展した取り組みで、意図的に計画した特別な活動ではない。花の色で染めることにこだわり続けた実践で、花の色の魅力に触れて自然の不思議を体験しようとした「科学する心」の芽生えでもあった。

クラス全体の活動と違い“お花チーム”という少人数の仲間に関わることに特別感もあった。どうしたいかを自分たちで話し合いながら進めたことで“こうしたい”という気持ちも強くなり、子どもたちがお互い意見を出し合って主体的に関わった活

動となった。

- 専門家が加わり魅力が膨らんでいった。専門家が語ることは、身近な大人の言葉とは違い、新鮮な響きとして耳に入ってきたように思われる。子どもたちは、大人も知らないことを知り得意気だった。その体験と感動は発表を通して、少人数からクラス全体の体験へと展開していった。日頃から表現活動を大切に、作品とそのプロセスを展示している作品展で、4ヶ月間におよんだ“お花チーム”の実践を紹介し、染めた布をコーディネートした服でファッションショーを開催、活動の経過を保護者と共有したことで称賛を得、子どもたちの自信へと繋がった。興味をもったことをとことんやる楽しさを体験し、“こうしたい”を実現しようとする熱心さが大人を動かす力となることや日常に変化を与えるエネルギーとなることを学んだ。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」